

先人の足跡4―感謝―

元陸軍中将 根本 博

教育問題プロジェクトチーム

今野 茂雄 陸自69

生立ち

根本元中將は、明治24年（1891年）、福島県岩瀬郡仁井田村（現在の須賀川市仁井田）に生まれました。

その後、仙台陸軍地方幼年学校、陸軍中央幼年学校、陸軍士官学校、陸軍大学校を優秀な成績を取めて卒業しました。内地では陸軍省、参謀本部に勤務し、支那（中国）に関わる業務につきました。支那勤務では現地によくの知己を得ており、陸軍屈指の中国通と評価されています。戦後の中華民国初代総統となる蒋介石とは、大正15年陸軍参謀本部の支那研究員として南京に駐在していた時に会っており、お互いに理想を同じくするものとして理解しあっていました。その後は、東満洲の第三軍司令官、次いで駐蒙軍司令官、終戦後北支那方面軍司令官兼駐蒙軍司令官となりました。

恩に感じるまでのいきさつ

大東亜戦争末期のことでした。昭和19年（1944年）11月から根本博中將は、北京の北西に位置する張家口の駐蒙軍司令官になり、翌20年（19

45年）8月北支那方面軍司令官も務めることになりました。北支那方面軍司令官として北京で果たした役割は、「日本人である限りは軍官民をとわず、日本軍司令官の責任において終戦処理を行う」という中国国民党側の方針に基づくもので、蒙疆地区をふくむ華北在留の邦人40万人、北支那派遣軍35万人の運命が根本個人の肩にかかってきました。

華北地区接收の中国国民党側司令官との対応折衝から、その年の10月には旧知の何応欽上級大將と蒋介石委員長を北京に迎えて、華北の終戦処理を、一つの模範として、全中国におよぼすべき話し合いが進められ、それが実行されました。

そして支那派遣軍105万人、一般在留邦人50万人は、中国側より要請されたアメリカ軍上陸用舟艇と輸送船により、翌21年末までには、全員日本へ引き揚げ帰国を終わりました。

こうして、勝敗を越えて根本個人に示された蒋介石、何応欽の温情が、何十万の日本人の命を救ったのです。

なお、同じ時期、満洲の関東軍は、ソ連軍の武装解除を受けた後、ソ連領内に移送され抑留される等悲惨な目にあっています。また、民間人も何の保護も得られず、多くの被害者が出ており、華北地区との相違を痛感せざるを

得ません。

根本が無事帰還を果たしたのは邦人と軍の帰国を見届けた昭和21年でした。恩に報いる準備行動

昭和21年（1946年）6月から始

まった共産軍と蒋介石率いる国府軍の内戦は、ソ連軍の全面的支援を受ける共産軍が次第に勢力を拡大していきました。蒋介石率いる国府軍は劣勢に陥り、各地で大敗を喫しついに中華民国總統の職務を副總統の李宗仁に譲ったと報道されました。

この報道は根本に悲しみと焦りをもたらしめました。

この頃から根本は、台湾へ行く渡航準備をし始めています。経済的に困窮するなか食糧難にも手を付けなかった趣味の書画骨董を売り始めました。そこには自分が行かなければとの思いがあつたのです。

根本には、蒋介石に対する終戦時の恩がありました。それは内蒙古の4万人の邦人と35万将兵を守り、故国日本へ帰国させてくれたことと、カイロ会谈において、「天皇制については日本国民の決定に委ねるべきだ」と主張し、これを守ってくれたという二つの恩義です。

押し寄せる共産軍に、自分一人ではないから、日本人としてその恩を返す

「何か」をしたい。せめて「死にいくこと」ぐらいはできる。たとえ役に立てなかつたとしても、自分が行つて、一緒に死ぬことはできるではないか。「わが屍を野に曝さん」と根本は決心しました。

そのような折、昔付き合いがあつた国民政府の要人黄郛の娘という人物からの手紙を受け取りました。手紙には「根本閣下のお力が必要なのです。何とか助けていただけませんか」とありました。根本は、「故黄郛先生も、私の力を必要としている。微力ながら、身命を賭してその期待に応えたい」と思いました。

また、その頃「李源」と名乗る台湾人も現れ、戦争中に根本が大変関わりがあつた「傳作義將軍の依頼によつてまかり越しました」と述べました。根本が一目も二目も置いていた傳作義將軍の依頼との言葉に「運命の導きか」と感じ、李源が手配した船で渡航の誘いに応じました。

根本は台湾へ行くに当たつて、通訳が必要でした。根本が真っ先に思い浮かんだのが「吉村是二」でした。吉村とは陸軍の支那畑の勤務で知り合い、信頼できる付き合ひをしていました。

後にその吉村が書いた「中国のおもひで」によると、（根本中將は、蔣總統の「怨みに報ゆるに徳を以てせよ」

と演説された恩義に報いようと深く期するところがあつて、日本帰還後、国府軍支援のため上海に赴いて微力を尽くし、且つ自ら死に場所を得たいと堅く決意されて、私に、わが身の骨を拾えと同行を求められた」と根本の思い出を述べており、真剣さが伝わってきます。

死を覚悟で台湾へ

家族には、「オレだけの恩義じゃない。百万近くの在留邦人の命を助けてくれたのだ。でかけにやらん」と渡航を偽装するための釣り道具とわずかな着替え類を持つて家を出ました。新宿に出て、さらに東京から九州へ向かいました。

渡航準備に手間取りましたが、昭和24年（1949年）6月26日、台湾を日指し宮崎県延岡港を出港しました。船は僅か26トンの小舟、しかも老朽船。途中船に浸水があり、食料が尽きるなどとても順風満帆といえる状況ではなく、恩に報いるため悪戦苦闘の末、15日目になんとか台湾の基隆に入港できました。

念願が叶う機会に一步前進

台湾について暫くたった8月中旬、蒋介石總統の部下である湯恩伯將軍の慰勞の宴に招待されました。湯恩伯將軍は2カ月あまり前、殺到する共産軍を前に「上海防衛」に失敗しましたが、

蒋介石の強い要請で「福建省主席兼綏靖主任」に就任したばかりでした。湯恩伯將軍は、日本の明治大学と陸軍士官学校を出た知日派でその部下には日本留学組や日本語が堪能なものが集まっており、すぐに打ち解けました。

翌日蒋介石總統と再会をしました。

このとき根本は、終戦時の恩義と台湾へ渡航する準備、助けてほしいとの手紙などの経緯を話しました。蒋介石は興味深そうに聞き、健康状態を尋ねました。さらに湯恩伯との福建方面への状況視察を勧めており、根本が快諾すると、感激した面持ちで「ありがとう」を繰り返しました。蒋介石の気持としては、「日本の將軍が命を捨てる覚悟でわざわざ来てくれた。是非その力を貸してもらいたい」との感慨と思われ

ます。根本の同行は湯にとつて百万の味方を得たようなものでした。湯恩伯は以後、根本を「顧問閣下」と呼ぶようになります。

8月18日、根本は湯恩伯將軍に同行し、大型戦車揚陸艦に乗つて基隆を出発し、廈門に向かいました。

廈門は20万人を越える人口が島内で生活しており、北、西、南の3方が大陸と向き合っています。3方から攻撃を受けたらひとたまりもない。また商業都市は食糧の自給も出来ないため持

久戦にも適さない。この島に固執すれば厦門・金門は一挙に敵の手におちるだろう、と一目で判断しました。次に大金門島に上陸し、島の東西南北の距離、砂浜海岸と地形の形状、潮流、風向の関係から「わたしが、敵側なら夜陰に乗じて海峡を押し渡り、ここに上陸する。そして、島を東西に分断して孤立させ、増援部隊を次々と送り込み、殲滅する」と考えました。この後、島の人口、島民の生計、作物などを調査し、この島は自活できると確信しています。

その夜、根本は湯に金門防衛戦の方針を提言し、受け入れられました。根本は9月以來、共産軍との金門の一戦に備えて島内を隈なく歩き、陣地の構築、交通路の整備、飛行場の開設などに邁進しました。また敵が侵攻すると予想した行動への対策を考え続け、塹壕を掘って土に潜り、そこで敵の上陸を待ち、敵戦車や歩兵が接近してから戦うこととし、敵が上陸するとき、敵兵が前進するや、海岸や岩陰に穴を掘って隠れていた者がすぐに敵船を襲撃し、「焼き払う」ようにしました。こうして敵の退路を断ち、増援を困難にさせようとしたのです。

恩に報いる機会到来
10月10日から11日にかけて大金門島の北方海上にある大嶼島、小嶼島の

2島が共産軍の手に落ちました。その後厦門も予定通り戦いながら後退し金門島の戦いになりました。

10月24日夜、金門島に対する共産軍の砲撃が始まり、やがて根本が予想した地点に上陸を開始し、暗闇のなか激戦となりました。夜明けになり国府軍の戦車が出動し、共産軍を追い詰めていきました。また海岸には彼らの乗ってきた多数のジャンクの帆柱が折れ、焼かれました。共産軍は古寧頭村等を拠点とし、退路がないため村人を盾にして戦いました。

26日根本は、抵抗する共産軍への攻撃に当たり、村民を犠牲にしないよう、古寧頭から北方海岸へ敵の逃げ道を作り、海岸へ後退したところで陸・海から攻めるよう意見を提案しました。26日午後3時根本の計画に基づく攻撃が実施され、共産軍に逃げ場がなくなり、ここに戦いの勝負が決し、2昼夜の激戦は終了しました。この時が、根本元中将の終戦時蔣介石に対する恩に報いた瞬間でした。金門島にある古寧頭戦役を記念する古寧頭戦史館によると、この結果は、「上陸した共産軍は約2万人、うち死者は1万4千人、捕虜は6千人と推定されています」と説明されています。これにより勢いに乗って攻め立てた

共産軍の進撃を完全にストップさせました。おわりに

根本元中将の存在は、国府軍にとっ て秘密でした。それは共産軍を撃滅し、台湾を守るのに、日本人の手を借りたと言えない事情があったからです。ただその功績を最も評価した人物は蔣介石でした。根本元中将の長女・のりは父の思いを聞いています。「蔣介石総統は両手で父の手を握って『有難う』と言ってくれたそうです。父はそのためだけに行つたのです。それで十分だったと父は言っておりました。蔣介石総統本人からお礼の言葉をいただいたこと、父が望んでいたのは、それだけだったのです」

また、根本の帰国に際し湯恩伯將軍からは、次のような「送別の辞」が贈られました。天にも届く高き情義 民国三十八年抗戦の中 わが国の情勢が混乱を極めていたそのとき 根本先生は日中の親しい関係を思い 更に總統蔣介石公の強くまっすぐな気持ちと 氣宇壮大な心持に心を動かされ 決然としてわが国に渡られ 私 恩伯と朝夕共にあり 金門・厦門 船山 諸島に出入りした 危難の時に生死

を省みず わが国に來られ他其の崇高な義侠の精神は この天地の間で長く久しく 敬われるべきものである 根本先生の帰国にあたり ここに一言を記し、記念とする 敬慕する根本先生へ 湯恩伯

根本元中将の、終戦時の邦人と35万將兵の帰国をめぐる蔣介石総統に対する感謝の具体的な行動は、終戦時に始まり金門の戦いをもつて終了しました。そして元中将の思いは、達せられ、国府側の元中将に対する思いは湯恩伯將軍の「送別の辞」に見られる通り高いものがあります。ここに、根本元中将の邦人と將兵の命を守る強い責任感の発露として、大局に立った判断と具体的行動をもつて成し遂げた、元中将の感謝の強い思いを感じることができ

ます。

【参考資料】

- ・門田隆將『この命、義に捧ぐ』
- ・小松茂朗『四万人の邦人を救った將軍』
- ・稲垣武『日本人を守る最後の戦い』
- ・根本博顕彰会『根本博追悼記念』
- ・根本博顕彰会 今井武夫・吉村是二編集『博三周忌追悼記念』
- ・陸上自衛隊幹部学校修親会編『統率の実際』